

コント『記念撮影』

一人でスマホ片手に自撮りをしているツツコミ（以下ツ）。
何度も撮り直していて、うまく撮れていない様子。
そんな中、ボケ（以下ボ）に話かけられる。

ボ…「あの、良かったら撮りましょうか？」

ツ…「あつ、すみません。良いんですか？わぎわぎありがとうございますー！」

ツツコミ、スマホをボケに渡す。

ボ…「一人でいらっしやったんですか？」

ツ…「そうなんですよ。一人旅が好きで。」

ボ…「へえ、良いですね。はい、じゃあ、撮りますね〜。」

ツツコミ、スマホに向かってピースをする。

ボ…「もつと笑ってくださいー！」

ツ…「あつ、すみません(笑)。」

ツ…少しぎこちない笑顔を浮かべてピースをする。

ボ…「もつと笑えますかね〜？」

ツ…「もつと?…あつ、すみません(笑)。笑顔あんま得意じゃなくて…。」

ツツコミ、頑張って笑顔を浮かべながらピースをする。

ツ…「どうですかね…?」

ボ…「いやいや、もつともつと!」

ツ…「…もつとですか?…いや、あの一旦、撮ってもらって大丈夫ですよ。」

「僕じゃなくて、景色がきれいに映ってれば良いんで。」

ボ…「いや、そういうわけにはいかないんで。」

ツ…「な、なんで?いや、これ僕の思い出の写真なんで、僕が良ければそれで良いんで。」

ボ…「僕の思い出にもなるんで!」

ツ…「いや、あなたの思い出にはならないんじゃないですかね?僕しか映ってないんで。」

「もうあんまり時間いただくのも申し訳ないんで、さっと撮ってもらって良いですよ。」

ボ…「いやいや、そういうわけにはいかないんで。」

ツ…「いや、あの、大丈夫ですよ。本当に。」

ボ…「いやいや、全然、僕のは気にしなくて大丈夫なので！」

ツ…「いや、あなたのことを気にしているわけじゃなくて…。」

ボ…「全然、本当に全然大丈夫なので。」

ツ…「いや、だから…。」

ボ…「全然、全然。」

ツ…「いや、もう撮れよ！！撮れよ！！なんで、撮らないんだよ！！！」

ボ…「ああ、ほらまた笑顔じゃなくなった！もっと笑ってください！」

ボ…「ずっと笑ってたわ！お前が早く撮んねえからこんな顔になってんだろ！」

「あ、もうやっぱり大丈夫です。自分で撮るんで。ありがとうございました。」

ツツコミ、スマホを返してもらおうとする。

ボ…「いや、それはだめです。僕が撮ります。」

ツ…「なんで？！なんでそんな頑なの？お前、なんなんだよ？」

ボ…「僕は誰かの記念撮影をしてあげるために、観光地を一人で徘徊している者です。」

ツ…「…はあ？え、それだけのために？一人で？」

ボ…「一人なのはあなたも一緒でしょ(笑)」

ツ…「あんまり一緒にしてほしくないですね。目的が全然違うんで。」

「え、カメラマンか何かですか？」

ボ…「いえ、素人です。」

ツ…「素人？めっちゃキモいじゃん。えっ、待って。これお金とか取られる感じですか？」

ボ…「いえ、無料でやります。」

ツ…「無料？ええ…？意味わかんないじゃん。なんでこんなことやってんすか？」

ボ…「ただただ喜んでほしくて善意でやっています。」

ツ…「善意？いや、善意でやってる割にはあなたのこだわりが強すぎて、僕にとっては

ほぼ悪意でしたけどね。」

ボ…「そんな！僕はただただ良い写真を撮って喜んでほしいだけなんです！」

ツ…「まあ、そんなに言うならわかりました。じゃあ、もう本当にさっと撮ってください。」

ボ…「ありがとうございます！」

ツツコミ、再びスマホに向かってピースをしている。

ボ…「ほら、笑ってください！」

ツ…「だから笑ってるって！この顔で良いから！」

「てか、あなたの不気味さを知っちゃったから、さっきよりも笑顔になるのが難しくなったんだよ！普通に怖いし、意味わかんすぎるから。」

ツ…「もっと、もっと笑ってください！」

ボ…「クツソ！チツ…、はあ…。じゃあこれで良いですか!？」

ツツコミ、当てつけのように目をひん剥き、齒を食いしばってバキバキの笑顔を浮かべる。

ボ…「お、いい感じですよ！今までで一番良い！」

ツ…「なんでこの顔が良いんだよ！観光地でこんな顔で写真撮ってるやついねえだろ。」

ツツコミ、しばらくその笑顔のまま。

ツ…「(イライラしながら)もう撮れました？」

ボ…「今、撮ってたの動画でした〜！」

ツ…「ふざけんなよ！動画でした〜！じゃねえんだよ！ぶっ飛ばすぞ！」

「動画でした〜は仲良い友達にやられてもギリつまねえのに、

初対面の人に、しかもこんなイラついてる相手にやんな！どういう神経してんだよ。」

ボ…「ごめ〜ん！じゃあ、本当に撮るね！」

ツ…「なんで今、距離感詰めてくんだよ。絶対タイミング違うだろ。」

写真を撮り終え、ボケがツツコミの方に歩み寄ってくる。

ボ…「はあ、やっと撮れたあ…。」

ツ…「なんでお前がそんな疲れてんだよ。意味わかんないだろ。俺の方が絶対疲れてるわ。」

「ありがとうございました。もうスマホ返してもらっていいですか？」

ボ…「あの…。撮ったお礼として写真一枚、記念に貰ってもいいですかね？」

ツ…「…は？え、なんでですか？だって僕しか映ってないですよね？」

ボ…「実は、撮影させてもらった人の写真を記念に集めてるんです。」

ツ…「気持ち悪っ。あ、さっき「僕の思い出にもなる」ってそういうこと？」

ボ…「そうです！しかも、僕が撮影してきた人、あなたでちょうど100人目なんです！」

ツ…「やばっ、なにその変なコレクション。俺以外に66人もあなたの狂った善意の

被害者がいるってことじゃん。」

「今すぐ、止めた方が良いですよ。えげつない迷惑だったんで。」

「あなたにとっては良い思い出なのかもしれませんが、僕にとってはすごい嫌な思い出になっちゃったんで。」

ボ…「そんな…。」

ツ…「まあでも、撮ってもらったのは事実なんで、写真あげますよ。

確認するんで、一旦、スマホ返してください。」

ボ…「本当ですか！？ありがとうございます！」

ツ…「こういうタイプの人、断ったら何されるかわかんないからな…。」

「写真一枚で逃げれるなら、さっさとあげて今すぐここを離れたい。」

ツツコミ、ボケからスマホを返してもらい、撮ってもらったスマホの画面を確認する。

ツ…「何これ?!全部、インカメラで撮ってた？お前の顔しか写ってないけど?」

ボ…「はい！誰かの記念撮影をしてあげている、僕の記念写真を撮ってたんです。」

ツ…「もう怖すぎる…。」

終